



秋田最前線

アキタサイゼンセン

「最前線で活躍する秋田の人」をテーマに、秋田出身、秋田在住を問わず紹介するこの企画。第8回目は、シイタケ栽培の廃棄物から着想を得た畠山琢磨さんにフォーカス！

シイタケ×カブトムシ×ベジタブルで持続可能な循環型農業を！

突然だが、実は秋田県は生シイタケの生産量が全国5位！というところをご存知だろうか？

2021年には京浜地区中央卸売市場への出荷量、販売量、販売単価が1位となる三冠王を達成するほどだ。そして、秋田県

も多いので廃菌床を効率的に処理出来るのも特徴だ。ラボの幼虫が年間に食べる量は約600トン！自社のシイタケ生産で出る約540トンでは足りず、他のシイタケ農家からも引き取っているという。

昨年からは幼虫たちが無事成虫になり、いよいよヘラクレスオオカブトを販売開始。自社サイトで販売を行う他、横手市のふるさと納税の返礼品にも採用され、販売は順調だという。ちなみに、なんとヘラクレスオオカブトにも「血統」という物がある。競馬のサラブレッドのような世界なのだ。



シイタケ栽培の廃菌床が昆虫を育て、その昆虫のフンが優秀な堆肥となる。

この個体は体長が大きくなるなど、血統によって特徴は様々です。創業当初に多くの血統を集め、こんなに多種多様な血統が集まっているのは国内ではここだけと自負しています。また、ブリーダーによって販売価格が変わってくる世界でもあるので、SNSでの情報発信等もきっかけとして、「このヘラクレスオオカブトなら大丈夫」と思ってもらえるように心がけています。現在では飼育する昆虫の種類も

増やし、更なる販路拡大を目指します。昆虫ファンのために、自社開発の昆虫育成用の資材も販売中だ。そして、畠山さんの発想は更に次へと向けられる。このヘラクレスオオカブトの幼虫の出すフンは、1日で100リットルにもなる。そのフンの成分を調べると、牛や豚のフンから作った堆肥に比べて、野菜を大きく育てるのに必要なリン酸やカルシウムなどが高い事が判明。

このフンを堆肥にして近隣の農家に提供。この堆肥で育った野菜を「ヘラクレスベジタブル」というブランドで販売することにしたのだ。今話題のSDGsののちとった取り組みにも思えるが、そもそも畠山さんの学生時代からの研究テーマが「経営体における持続発展の要因分析」だったことも大きい。「研究が楽しくなっちゃって、大学卒業後、農業経済学をより

学ほうと東北大学の大学院に進むことを決めたんですが、しばらくして父の病気が発覚。院で研究をしながら父の会社に入社し、学生と社会人の二足のわらじを履きながら、なんとか2年で卒業出来ました。父と一緒に仕事が出来たのは1年ちょっとでしたが、得難い経験が出来たと思います。畠山さんは現在、父親が立ち上げた会社と自分が立ち上げた会社、両方に籍を置きながら、忙



秋田の第一人者

Pioneer

■ 今月のパイオニア

Pilz 株式会社

畠山 琢磨

代表取締役



■パイオニアの拠点

住・横手市十文字町十五野新田
字明神東 58-2
問・0182-24-1622



ヘラクレスオオカブトの幼虫を測量中。驚きの大きさ！

のシイタケ生産量の7割を占めるのが横手市である。そんな横手市で、シイタケ農家の2代目として生まれ育った畠山さんが注目したのは、シイタケ栽培時に大量に出る廃菌床だ。シイタケの栽培後は再利用が出来ず、放置しておくと思臭が放つてしまう。廃棄方法は地域共通の課題となっていた。この状況を打開しようとした畠山さんが思いついたのが、高額取引される外国産昆虫・ヘラクレスオオカブトの飼育だ。昆虫マニアの中では憧れとも言える有名な昆虫で、オークションで100万円以上の値がつくこともある。幼少期、自宅の畑に積まれた廃菌床にカブトムシが沢山卵を産んでいたことや、そのカブトムシを父が夏の縁日で販売していた思い出がヒントになった。2019年にスタートアップとして株式会社ピルツを立ち上げた畠山さんは、菌床ブロックの製造・販売を開始。この菌床の原料は県産の木材だ。そしてその菌床でシイタケを生産し、その廃菌床をよりヘラクレスオオカブトが育ちやすいように発酵させて調整。意外にもここで役立つのが横手の豪雪だ。冬場の雪が、廃菌床のアク抜きを助けてくれるという。ピルツでは「ヘラクレスラボ」と呼ばれるハウスで昆虫を育成しており、温度管理や効率的な配置など、シイタケ栽培で培った技術や知識が生きている。ヘラクレスオオカブトは幼虫の時期が約3年と長く、食べる量

■ Profile

畠山琢磨 (はたけやま・たくま)。34才。
Pilz 株式会社代表取締役。
シイタケ農家の2代目として育ち、東北大学大学院農学研究科卒業。
2019年にPilzを立ち上げ。
趣味は昆虫観賞で、自宅でも昆虫を飼育している。

しい毎日を過ごしている。シイタケ栽培のブランド化にも取り組んでおり、雪国秋田で日本一美味しいシイタケを1と厳選したシイタケを「鱗花くりんか」として全国へ販売中。昆虫をテーマにしたイベントも既に開催しており、今年は秋田市でのイベントも企画中だ。そして、畠山さんの語る夢はまだまだ尽きない。「SDGsを学ぶ入口になって欲しいという思いから、ヘラクレスベジタブルのロゴは秋田の小中高の学生さんから募集したものなんです。昆虫を愛でる文化を産業にしたという思いもあります。日本では昆虫と言えは秋田、秋田と言えは昆虫、というブランドインクが出来れば、地域に還元インクにもなると思っていまして、もっと発展させて、もっと地元を盛り上げて行きたいです」と、意欲的な笑顔で話ってくれた。